

生をえらぶ

エステル・サムソン

〈風のたより〉

エステル・サムソンはキブツカブリのメンバーで、すでに五〇才を越している。

日本人の三グループにヘブライ語を教えた。オランダに生まれ、幼時から聖書、ユダヤ文化などの教育を受けた。ナチスの時代には家族から離れ、ひとりヨロツバのナチに反対する地下組織の家にひそかにかくまわれ、三〇軒ほど転々して、終戦に相前後してマルセイユからキブツを経てイスラエルに移住してきた。その時期がちょうど独立前後の激動期にあたる。キブツのメンバーになる前に宗教キブツに行きたいと思つたこともあつたし、今もあるという。家族を全部なくしている。

彼女からの手紙の抄訳である。

「……私たちの間には多分ひとつの大きな

違いがあります。聖書の「申命記」に以下のようない節があります。

——生と死を私はあなたの前に与えた。祝福と呪いを私はあなたの前に与えた。あなたは生をえらんだ。——30章19節

ユダヤ人全部が毎日聖書を読んでいるわけではなく、ユダヤ人の中にもその書物に一体どんなことが書かれているのかまったく知らない人が多くいます。しかし、たとえ二世、三世代と民族の遺産から遠ざかっていたとしても、その伝統の根本的なものは民族の中に残っていると私には思われます。ユダヤ人は生をえらんだのです。それを意識している、していないにかかわらず、生きることには最も重要なことなのです。そして、自分の生に自分で手を下すものは気狂いか（ロッド空港での三人の日本人のように）という疑問。いえ、決してそうではありません。精神病者

とも思いません。かれらは生の中に興味あるものを発見する力を失ってしまったのです。もし生きつづける理由がないとしたら、生きつづけないだけです。そのためには特別な精神力がいります。もし他に生きることには何物も残っていないとしたら、多分死への情熱が唯一最後のものでしょう。

さて、ロッド空港でのことです。ここには他の要素があります。もし私の理解が正しいればこうでした——ここに世界で起こっていることすべてに反対の立場をとる一群の人びとがいます。日本にも、そして他国にも。もしこれらの人びとが物事を変えようとする場合、私はかれらの行為を信ずることはできません。すべてに反対しているので、かれらの言うことを世界の「敵たち」が聞いてくれるという希望を、もはやかれらは持ちえないのです。その故に、世界が目覚め、かれらのことを聞くように、どんな破局的なことも辞さないのです。

世界を建設的な方法で変革することを、これらの人びとが知っているとは私には信じられないとすでに言いました。最初からすべてに先立って死を選び、生を選んではないからです。誰のためでもよいが他人のための死、

あるいは自身のための死。もしこう言うことができるとしたら、かれらを理解はできません。しかし、どんなことをしてもかれらの選んだ手段を認めることはできません。私自身も物事を変える方法を知りません。ただひとつ確かなことは、私は生きることの中に、そして生きることの中の美しいものを知ることの中に、方法を求めるということです。

もうひとつ付け加えると、今度の事件の際例の日本人たちは多かれ少なかれ、アラブ対イスラエルという枠組の中で働きました。ゲリラ組織の性格も事後の建設計画のない死の選択だからです。空港での殺害のあと日本人が自殺を了承したことはアラブ人にとっては些細なこと、安堵感をもたらすだけのものでした。そうしたことはアラブ人だったら決してやらないことです。

私の印象では、アラブ側組織が日本人を利用したのではなく、その逆です。三人の日本人は自分の目的のためにゲリラ組織を利用したのです。ヒッチシ、成功したのです。そして事実世界の多くの部分に衝撃を与え目覚ませました。それでなくとも不安に満ちたこの世界に、また新たな恐怖を持ちこんだのです。

きました。「なぜかれらまでたたかうのだろう」と。

ここでは資本主義対共産主義という対立関係もなく、アメリカ人がベトナムに行っているようにひとつの国が他の国に無理じいに戦争しにでかける問題でもなく、一緒に住めないうほどの文化の違いの問題でもなく、他の国の侵略でもなく、など、私たちの知っている戦争にみちびく理由、原因は何もない。多分経済の問題（あまり重要ではない）もあるかもしれないが、アフリカの部族のあいだでそれが大破局に至るといふこともなさそうです。

と、突然理屈では本当は知っていたことだが、あることがひらめいた。——戦争は人間の心のうちにある。——理由などいらぬのです。この突然の認識は私をおびやかしました。やっとその後ふたたび以前に信じていたことをとりもどしました。つまり、理性を通じてのみ人間は暴力をやめることができる。そして、もしかしたら理性は、まず第一番に死への恐怖を克服できるかもしれない、と。

ここで再び先の私たちの問題、——自分の生をまったく消滅させるといふ自殺の恐怖を克服できるかどうかの問題にたどりつきまし

た。それを裏返しにした形として、生きていくもの、生の側に属するすべてのものを殺しつくすということがありうるとしたら、その背後にはほんとうに生きたいという願望があるのではないのでしょうか。簡単に生きる望みを失なうことはジェノサイド（無差別殺りく）をもたらしことにしかありません。

別に言う必要もないのですが、キブツにおいてはメンバーの日本人に対する態度には何の変わりもありません。キブツ外の人びとの

反応は私たちにとってもみっとも良いものはありませんでした。最近私を訪ねた日本人も聞くに耐えない、かれらのうけた暴言の話をしてくれました。馬鹿はどこにでもいるし、それに対してはどうしようもないということでしょう。特にそうした不意な言動が私たちにはしやくにさわるのです。私たちユダヤ人は常に一般化（ひとりのユダヤ人が何かしたとき、ユダヤ人はやっぱり……といったこと）に苦しめられて来ながら、これほど早く自分たちの歴史の苦しみを忘れてしまおうとは思っていません。

く風のたより

新しいキブツ—ゲゼル

—若者と自然農法と—

古い大きなキブツにまじって、若く、新しく、特異なキブツがイスラエルにはある。

キブツ・ゲゼルは二年程まえ、二〇〇人の若者たちによって建設された。これは、レポーター、ケン・シエルがゲゼンを訪

れ、彼らの計画や問題について報告したものである。

（以下の記事は週刊「エルサレム・ポスト」72年7月11日号から抄訳された。）

「君はなぜ、キブツ・ゲゼンにやってくる

ことになったの？」

キブツの野菜畑でいそがしくそうにわをふっている一人の娘に私は尋ねた。このキブツでは、化学肥料や殺虫剤を使用せずにメンバー用の野菜を作っている。

「トルコのお風呂でよ」

とバンクーバーから来た二〇才になったばかりのリンダは答えた。

「トルコの風呂で？」

「ええ。イスタンブールのことよ」

友だちと共にイスラエルへくる途中、イスタンブールの風呂のなかで、ちょうどゲゼンにいてイスラエルを出てきたばかりの人と会ったのだとリンダは説明してくれた。

「私たちは菜食主義者なの。それに、共同生活を試みたいと思っていたから、イスラエルに到着するとすぐ、ここへ来たのよ」

それは五ヶ月前のことだった。

「じゃあ、どのくらいここに滞在するつもりだったの？」

「さあ、それは私たちにも分らないわ」

リンダがゲゼンに来ることになった事情とか、彼女の未来に対する態度とかは、決して特殊な例ではない。こうしたことは、建設されてから半年か一年を経た若いキブツの

直面する問題のうち典型的なものなのである。

ステイプ・フラードは、このキブツの書記であり、キブツ建設に着手した最初の二人のうち現在もここに残っている七人のうちの一人である。彼は、彼らの問題について次のように語った。

「我々がここで生活をはじめて以来非常に多くの人がここへやってきた。何人かは数日間滞在しただけだったし、何人かは数ヶ月だけだった。だが結局のところ、彼らの大部分はいろいろな事情で、彼らの国や大学へもどっていった。」

こうしたことは、我々の望んでいることではない。我々は、人々がふらっとやってきてまたふらっと出ていくようなそんな場所を作ることには興味がないのだ。我々が欲しているのは、ここに我々の故郷を作ることだ。」

現在、一五人程度のメンバーを核としたキブツ・ゲゼルは、こうして通りすぎていくだけの人々に対しては門戸を閉ざしている。外から来る人々は、最低一ヶ月間キブツに滞在して、いっしょに訓練に耐える気持がなければ受け入れられない。そのあとで始めて、その人々はメンバーを志願することができ、半年を経て、もしすべてが順調にいったのなら

メンバーとしてむかえられる。

ステイプはさらに続ける。「この方法はうまくいったようだ。子供のある人たちだとか、まもなく子供が生まれるといった人たちは、メンバーとなる日も近いだろう。我々は五〇人から七〇人のメンバーを得ることができなくてはならないと考えている。それが我々の望むメンバーの数なのだ。」



キブツ・ゲゼルの社会は若く、大部分は英語を常用語とする国からの人々でしめられている。平均年齢は二〇代の前半である。ユダヤ基金・農業省、そして近隣のキブツからの援助を受けて、農業技術も進歩した。

最初の二〇〇人の若者たちは、組織的なつな

がりによって集まったのではなく、ごくあたりまえの知り合い程度のものであった。彼らは一九六九年の後半か一九七〇年の初頭に、キブツのための用地が確保されたあとで、集められたのである。キブツは五〇〇ドウナムの広さがあり、それはテルアビブとエルサレムを結ぶ幹線道路の途中のラムレから数キロほど東にあって、聖書に描かれているゲゼルの町の遺跡のある丘からそう遠くないところに位置している。

「最初は」とステイプは言った。「我々はほんの少ししか知らなかった。始めの連中はキクイモの畑を作り、我々はその世話をした。我々はまた、ヘブライ語の勉強もした。しかし我々は最初の冬の期間、一日一人当たり、六リラ（五〇〇円程度）のユダヤ基金からの補助金によって生活した。」

春になって、さらに農業について学び、なにがしかの収穫があった。若者たちは良く学んだ。この春、彼らは三七〇ドウナムの小麦と六〇ドウナムのキクイモ等を植えた。彼らは又、アシッド市にあるサンフロスト冷凍食品工場との提携のもとにメロンやトモロコシも栽培している。

蜜で甘くする。

これらの計画は、キブツを自立への道へ一歩近づけた。「我々は依然として、設備だとか種といったものを購入するために補助を受けなければならぬ。けれども、生活していくうえでの費用に関しては、補助なしでやっていけるようになった。」とステイプは説明した。

メンバーの食べる食物の大部分は、自然栽培によって生産される。ここで生産される自然食品は、近い将来ヨーロッパへ輸出することも可能となるだろう。

「農業省とホルカニ研究所とユダヤ基金とは、どんな肥料を使い、作物をどう世話したらいいのかといった点に関してアドヴァイスを与えてくれた。ヨーロッパにおいては、この種の野菜に対して大きな需要がある。ヨーロッパでは、汚染と生態学的なバランスの問題への関心が高まってきている。ヨーロッパには、汚染され有毒な物質によって処理されたものを食べたくないというたくさんの人々がいる。」

ゲゼルの食堂では肉が出されない。キブツのメンバーが、自然食品を食べたいと望んでいるからであるし、宗教的な理由によるものもある。パンは無漂白で、玄米を食べ、蜂蜜

メンバーのうちの者は宗教的である。

「我々はなにも強制することを欲しないし、だれもそうする必要はない」と、最初の二人のうちの一人であるメンバーは言った。「だけれども、相互の一致にもとずいて、どのような集団も守らねばならないある原則がある。」

こうしたもののひとつにドラッグがある。「イスラエルの法律によって禁じられているということと、我々の理論的な理由から、我々はこのキブツにおいてはドラッグを認めないことに決定した。そして、我々はこのに来るすべての人にこのことを明らかにしている。」

く風のたより

アブラハム・ベン＝ヨセフ氏 を迎えて

名古屋読者会 梶原和義

去る五月二十三日、北海道教育大学教授草刈善造氏と、アブラハム・ベン・ヨセフ氏が来宅された。当日はできるだけ多くの人が集っていたとき、ベン・ヨセフ氏を囲んで座談会を持ちたいと思ひ、呼びかけておいたが、

あいにく多忙の人が多く、結局、会員の堀井夫妻と、妹の順子、妻と私の五人で迎えることになった。

草刈教授を名古屋駅へ迎えに出で、一緒に家に帰ると、日焼けした、たくましそうなヨ

セフ氏が我々を待っていた。かなりの年配ではあるが、いかにも丈夫そうで、土と共に一生を過してきたという感じの人である。

話しかたといひ、態度といひ、実にいんぎんである。今まで多くの外人にあったが、こんなに謙虚な人には会ったことがない。本当に枯れた人とはこういう人のことであろう。少し話しただけですっかり好きになつてしまつた。

ヨセフ氏の経歴は、アメリカから出版した著書「Ancient History: The Twentieth Century」によると、一九一七年、イギリスのミドルセックスで生れ、ロンドン大学で社会学の学位をとり、活躍した。この間の詳しい事情はよく分らないが、前著の他に出版されているというから、かなりのインテリである。

一九五〇年にイギリスを去り、イスラエルへ渡つた。それは「フットボール、ポップ・ミュージック、ビールの支配体制の嫌悪」からであつた。そしてキブツ「ササ」のメンバーとなり、中心的な存在として活躍した。

ヨセフ氏によれば、本当のユダヤ人、約束の地を求めてイスラエルへ来たが、すべては期待はずれだつた。イスラエルのユダヤ人達は、あまりにも西洋化、物質化してしまつて

去年の夏、ドラッグをもちこんでこようとした何人かの人たちがいた。「だが、我々はしっかりとした態度を取つたので、今では問題はなくなつてゐる。」とステイプは言った。

だがその他にも、ゲゼルには問題がある。そのうちの最も大きなものは、キブツの大きさに関することである。

「もし、ここに住み我々と共に農民になろうとするもう二〇人の人がいたら、我々は本當にこの社会を建設することができよう。」と、ゲゼルの若い書記のステイプは、開拓者がみせる確信に満ちて言いきつた。

いる。ヨセフ氏はこれにたえきれず、日本へやつてきたのであつた。東洋、特に日本にはまだ精神的なものが残っているはずであり、それを求めて来たという。できれば日本に永住したいということだが、何が彼をしてそんなに日本びいきにさせたのか分らない。

食事をしながら、色々のことを話しあつた。

「キリスト教についてどう思いますか。」という堀井氏の質問に、「キリスト教にはユダヤ教にはない何かがあると思う。キリスト教をもう一度見直してみたい。」ということだつた。世界各国のキリスト教の動向について、実に詳しい。その他の宗教についても該博な知識をもつてみえる。六千年の人間の歴史が圧縮されて、そのままヨセフ氏の中に入つていっているという感じである。

日本の仏教にも深い関心があり、京都や奈良をゆつくり探訪してみたいという。

「永遠の生命についてどう考えますか。」という僕の質問に、「人間は蓄電池のようなものだと思ふ。永遠の生命があるとしても、それをつかまないうちにエネルギーが切れてしまふのではないだろうか。」と残念そうに答えた。これについては色々話したいことがあつたが、次回にすることにした。

年令は五十五才であるが、年よりふけてみえる。しかしいかにも丈夫そうな体つきである。今日ここへ到着する前に、名古屋城や熱田神宮を、重いリュックとトランクを持って歩いたという。この調子でいくと、日本中はおろか、世界を歩いてしまふという元氣さである。

堀井氏が、「あなたがたユダヤ人はどうして世界的な考え方ができるのですか。」と尋ねると、「それはアブラハムがそういう考えをもつたからです。私もアブラハムの子孫です。」と答えた。その時のうれしそうな顔は今でも忘れられない。アブラハムの一生は旅であつたが、ヨセフ氏にもそういうた所がよく現われている。文字通り世界をわが家としている様子である。

ユダヤ人が未来をどう考えているかを聞きかつたので、尋ねてみた。「人間歴史は無意味に動いていっているのではなく、あるプログラムに従つて動いていると思ひます。歴史は閉ざされたものではなく、開いたものだと思います。ナチスのユダヤ人虐殺がイスラエルの国を生んだように、現在の苦しみは次の発展の基礎となるものです。」と将来に強い期待をおいた返事であつた。

話題がかたよってしまつてはいけなないので、二人の奥さんにも質問してもらつた。草刈教授からも、イスラエル滞在の経験から、ユダヤ人の日常生活について話して頂いた。

奥さん達にとつての関心はやはり台所のことである。ヨセフ氏からはユダヤ料理について話していただいた。

草刈教授とベン・ヨセフ氏との出会いは、イスラエルのキブツであった。ヨセフ氏の来日については、草刈教授に負う所が非常に大きい。こんな関係から、話題は自然にキブツの方へ移つていった。草刈氏は、イスラエルでのキブツの体験のこと、日本の共同体のことを話した。ヨセフ氏の来日の目的は、こうした日本の共同体を視察すると共に、協力し、よりよい共同体を建設することらしい。

ヨセフ氏の考えている共同体は、社会主義的なものであるらしい。しかし現在のソ連圏や中国の社会主義とは全く違う。社会主義とはそんなものではなく、全体と個人とが完全に調和した、キブツのめざしている理想的な形態であるという。社会主義が誤つた形で行なわれているということは、どれほど多くのマイナスになっているか分らないという事だつた。

ヨセフ氏の希望は理想的な社会主義が、世界において二十パーセントになることである。そうすれば世界の政治に対して、圧倒的な発言力を持つことができるからである。そのため、世界各地ではばらばらにある共同体の世界組織をつくつてみたいと言ふ。草刈教授もそうなればすばらしいことだが、難しい問題があると云つていた。

話はつきなかつた。特に宗教的、倫理的なことになると、ヨセフ氏は熱弁をふるつた。いかにも自分の領域だと言わんばかりに力が入つた。ヨセフ氏は北海道別海町のヤマギシズム北試農場に滞在するということだから、機会を得て再会し、もつとつっこんで話しあ

キブツで神式結婚式

く風のたより

世話係の久雄さんと千賀子さん

机の上にはかわいらしい桃色のバラ（カーネット）が、横の窓には真紅の高貴な装いのバラ（バックラー）がみごとに咲き、どうにか女の子の部屋らしくなっています。

いたいと思ふ。

当日は堀井氏宅で一泊し、翌日の昼頃、二人は大阪へ向つて出発していった。

それから一週間後に、テル・アビブ、ロッド空港で、日本人ゲリラによる機関銃乱射事件が起つた。事件を憂慮し、イスラエル、ヨーロッパのユダヤ人達に手紙を書いた。つきつきと「我々の関係は決して変らない」という手紙が来たが、まづ先に来たのはヨセフ氏からであった。手紙には、第二次大戦中に満州で二万人のユダヤ人を救済した、樋口季一郎將軍を掲載した、新聞の切りぬき記事が同封してあつた。

で歩いてゆくのが私の一日のはじまりです。

温室の中は甘酢っぱい香りが漂い……なんてロマンチックな生やさしいものではありません。強度の農薬のせいか目から涙がポロポロ、熱い、熱いというのもめんどくさくなるような蒸し風呂。おかげでこのごろ少しスマートになつたような気がします。

ちか子さんと久雄さんの結婚式の写真を送ります。岩戸の前で雨ごいをしている国際版みたいでしょう。手造りの祭壇、杯など、本物はもつとすばらしいんですよ。頭の中いろいろ思い浮かべているでしょうお二人。真剣に祝詞をあげているユカタ姿の神主さん（衣装まにあわず）、そしてたくさんの友、一種の「ジョー」にちがいないと思ひますが、淡いほのぼのとしたものを感じたのは私だけではなかつたようです。ちか子さんのウルパンが終る8月10日ごろからバルカイに来られるとか、楽しみです。

グループ解散まであと二ヶ月、本当に短いですね。残された時間でどれだけ当初の目標を達成できるかわかりませんが、急にファミリーに通いつづけたら、シャバトにも働いてみたり、私なりに最後のしめくりへとい急いでいます。汗びっしょりになつて仕事を終えた時の気持は最高ですね。働きつづけること



キブツ、マアガン・ミハエルでの結婚式のクライマックス。「のりと」をあげているのはネティープ・ハラメッド・ヘイの研修生藪崎君。

の中から、精神的、体力的な自信もついてくるし、また今までよそよそしかったキブツとの関係もわが家のような親しみがわいてくる。このままの調子でいいたら、数ヶ月後、ヒョウタン島を離れるとき、とてもつらい思いをしなくてはならないようです。

キブツ・バルカイ 沖山 京子

釜ヶ崎労働者にカンパを!

御存知のように釜ヶ崎では労働者、活動家に対する弾圧がつづいています。5月28日以来逮捕者は40名にものぼり、さらに泥酔保護という名目のもとに、80名の労働者が検挙されています。

6月28日、7月8日と二度にわたり「赤狩り」が強行されました。暴力手配師追放に立上がった労働者の一斉手入れがあつたのです。釜ヶ崎における暴力団支配を積極的に容認しようとする大阪府警は、いわゆる活動家と労働者との分断を画策したのです。逮捕された労働者の中に、事件当時東京に行つていた者、ドヤで寝て事件を知らなかつた者もいることは何を意味するか。

関西救援センター開所以来という悪質な差入れ妨害等、救済活動は困難を極めています。何よりも連帯とカンパを!

岩田 秀一

送り先は 大阪市北区浪花町二二五
関西救援連絡センター

釜ヶ崎救援会

研修生家族会の報告

さる七月二三日、午後一時から、家の光協会役員室において、第九回キブツ研修生の家族会、第二回目の会合を催したところ、出席者四六名ありました。まず研修生より送られた最近のキブツその他のカラーイラストを三〇分程みて、そのあと当協会代表手塚常務理事の主要左記のような挨拶があり、これに対して盛んな質疑応答がつづきました。その後各グループ別の話合いとなり、四時一五分散会した。

手塚常務の挨拶概要

さる五月三〇日、テルアビブ空港における日本青年三名による無差別射撃事件は、その暴虐非行の点で世界を驚かせました。みなさんも現地に子弟を送っていただけに、どうなることかと夜も眠れないほど心痛されたことと拝察申上げます。当時みなさんからお問い合わせにお答えした通り、現

地に連絡したり、イスラエル大使館を訪ねたり、最悪事態をも予想した善後策も考えた次第でありましたが、キブツ側の冷静な心尽しと、研修生一同の沈着な行動により、信頼関係に寸分の破綻もなく切り抜けたことは、本当に幸いでした。

ところが六月一三、一四日のNHKテレビ放送で研修生の一部不穏な言辭があり、これに対する取材記者の研修生全体に対する痛烈な批判が俄然問題化し、その收拾に苦慮した次第であります。表面化した問題はならないことを念願しております。

なにぶんにもキブツの思想は時代に一歩先行しているだけに、とかく誤解されがちです。しかし時代は一歩一歩とキブツのような協同体社会を必要とする方向に進んでおります。

日本は今後中国大陸との国交正常化と共に人民公社の思想精神に触れざるをえない



でしようが、キブツ思想を本能的に理解しておれば、その思想や精神も冷静に善処することができようと思われまます。

大半のキブツ研修生は、決してNHKの批判のような浮博な気持ちでイスラエルに行ったではありません。まづ家族の方からキブツ研修の意義を正しく理解していただきたい。そのためにも、この種の会合をもつと有意義なものにしたいと存じます。

協会日誌

7月2日 厚木振出塾の近くの学校のグラウンドで、「ぐるーぶ・もぐら」「厚木振出塾」「夜迷亭」の人たちが集まってソフトボール大会をするというので、こちらからも二名参加。試合終わって近くの中津川に泳ぎに行つたが、冷たい水が快い。

7月3日 家の光会館で協会の理事会。キブツ研修生の派遣について相談。アメリカのコミュニケーションに住んでいたというトムという青年がくる。

7月4日 南北朝鮮が南北平和統一に関する画期的な共同声明を出す。米中、米ソと続く国家間の緊張緩和がはぐらにとつて何を意味するのか、じつくり見つけてゆこう。

7月5日 毎日新聞にキブツ研修生募集のことが出て、問い

合わせが増える。

7月7日 共同体研究会を久しぶりに再開。中島泉さんが、「ガンジーとサルボダヤ運動」について報告。ガンジーから学ぶものは実に多い。

7月8日 府中の「ぐるーぶもぐら」でおこなわれている月刊キブツ東京読者会に参加。この日のテーマは「備北共同体」

7月9日～13日 哲は、全協連の会合に参加するために関西へ。全協連では岡山に事務所と農場を組み合わせた新たな拠点をつくらんと張り切っている。

途中、ヤマギシズム神戸案内所向井孝さんたちの共同部屋、コミュニティ好き者会の近藤くんの家、FIWC東海の共同生活の場などに寄る。

7月17日 共同性発見集団の会合。

7月18日 キブツ・エインシエルの出身で、現在アメリカの大学院で学んでいるアミー・

ルーリー氏くる。彼が、イスラエルのガリラヤ地方にある自然農法をやっている小共同体について話してくれたが、面白い試みらしい。

7月19日 三里塚に一年半も生活して現地の農民と行動をしている松浦くんくる。たくましく日焼けしている。

7月20日 備北共同体運動の中心の担い手である尾関弘と村松英子両氏がくる。鳥根県の弥栄村に新しい土地が見つかったとのこと。

この日、協会まで自転車に乗ってきた一人の青年が、その自転車を送りつけてくれる。

7月22日 府中の「ぐるーぶもぐら」で月刊キブツ東京読者会があり、尾関弘氏が備北共同体運動について語る。この日は北邦彦、寺田任、見田宗介氏など多様なメンバーが集まる。

7月23日 家の光会館でキブツ研修生の家族連絡会をおこな

い、五〇名ほどの参加がある。

7月26日 病気ががりの長谷川進氏くる。元気そうだ。

久しぶりに広河隆一氏くる。「ソビエト・コミュニケーション」という興味深い本を翻訳中という。「ぐるーぶ・もぐら」が事務所所に冷蔵庫を寄附してくれる。バンザイ。

7月29日 ヤマギシズム東京案内所が都合で一時間閉鎖になるとのこと。特講の案内ぐらいならしばらくは代行できるだろう。

7月30日 自然研究会で薬草に親しむべく東京都薬用植物園へゆく。

8月3日～13日 允士、恭子、哲は北海道へ。手塚さんも同時期に北海道へ。ヤマギシズム北海道試験場の収穫祭に参加し、釧路の近くにある農場を見学したりする。北海道は、新しい試みをしようとする者にとつてよい条件をそなえた土地のようだ。帰京して、暑さに驚く。

新しい農村指導者の雑誌

地上

B5判 ● 定価140円(通常月号)



激動の'70年代を乗り切るため 農協役職員、農業経営者は

全員読もう

正確な情報／正しい分析による

重点特集

● 3つの重点ポイント

農業・農政の問題点をつく

農協のあるべき姿を追求する

生産と販売戦略の方向をさぐる

お申し込みは農協へ

制作部メモ

▼国立西洋美術館に、「貧しき漁夫」と題された小さな作品がある。全体を地味な色調でおきた単純な構図の絵だ。小舟のなかに一日の漁を終えた年若い漁夫が立っている。その足もとには、赤児が寝かせられている。多分、妻に死に別れたこの漁夫には、その日も魚がとれなかったのだ。貧しさにじつと耐え、祈りをささげているような表情から、深い悲しみが伝わってくる。それは、ミレーの作品から受けるのと同じような忘れがたい感動をぼくに残した。 允士

▼涼やかな北海道での旅を終え上野駅へ降りた時、あまりの暑さと人の群れに思わず、たじろいでしまいました。……北国の原野に生きる根をおろした強靱な人々、そして自然との

新鮮な出会い。今度の旅でのこうした出会いは、何かを、創りだしたい、という欲求へのあらたな発火点ともなったようです。……リュックをかき直し、再び気の遠くなるような雑踏の中を、旅の思い出と創造への意志をたしかめつつ、小さな事務所へ帰りつきました。 恭子

▼ちえ遅れの子どもたちの施設で働いている友人が、こうした子どもたちでさえ、現在の社会の管理体制の中にガッチリと組みこまれて、人間として自由に生きる喜びを奪われつつあるという現状を語ってくれた。そして、彼自身はその子どもたちの管理者に甘んずるのではなく、共に生きてゆく仲間になりたいと語った。ここには重要な価値転換が感じられる。管理社会の一歯車になることの空しさに気づいて、「共に生きる」という何よりも大切な感覚をとりもど

そうというのである。先日、ほくも北海道の原野を歩きながら自然と「共に生きる」ことの大切さと喜びを痛感した。 哲

▼今月の特集にはアメリカの運動の中からうまれた、いくつかの基礎的な論文を集めた。去年の10・11月号ではアメリカコミューンの生きのいいのを並べてみたが、今度は多くの心境の姿

化か、あるいはかれらの変化が実に勇ましくもないのが並んだ。しかし、真の変革に必要なのは大声のどんちゃんさわぎ、乱行よりも、内にこもったしみじみしたよろこび、充実感であることを知っているアメリカ人も多い。その意味で今度の号は、特にアメリカ人と限らず、ほくら誰かと言いつつ、ユニバーサルなものになったと思う。 ヒコ

■直接購読（入会）のすすめ

この雑誌は主に定期的な直接購読者（キブツ会会員）によって支えられています。1年間（12号）の会費は入会金（200円）とも2,000円。申込みは、現金書留か振替で、氏名、住所、生年月日、職業など書いて、送って下さい。

■月刊キブツ取扱書店

東京＝新宿紀伊国屋、神田東京堂、模索舎、ウニタ書店、国分寺アヴァン書房、駒場書店
京都＝京都書院 札幌＝富貴堂、北大生協、アテネ駅前店 仙台＝八重州書房 盛岡＝第一書房 福岡＝九大生協 名古屋＝おばた文庫 富山＝清明堂 松本＝遠兵ブックセンタ

■印刷所＝創土社 東京都港区芝5-16-13 電話 452-0501・6069

「月刊キブツ」 1972年9月号（通巻102号）

頒価 150円 送料16円（1年間2,000円）
東京都渋谷区代々木4-5-14 参宮橋ハイッ10号 日本協同体協会
電話 370-2813 振替・東京 24403